

加賀海岸観察会のしおり

編集 藤田

はじめに

「昨年4月の中頃、前加賀市長・大幸 甚さんから広大な砂丘の長年にわたる緑化は海の生き物たちにとってもよい効果を与えている可能性が期待されるので、調べてもらえないかとの電話が突然かかってきました。よく話を聞いてみると、いろいろと専門の研究者に問い合わせたが、陸の緑化が海の生き物に影響を及ぼすという分野を超えた難しい課題にどなたも対応してもらえなかつたようでした。そこで、ここは森里海連環学の出番と調査を引き受け、現地を視察し、調査を行うことになりました。馳文部科学大臣の視察を受け、世界自然遺産への登録の可能性が検討されました。」（5月27日 大幸先生講演会のときの田中克先生のコメントより）



このようなきさつがあり、大幸先生のご尽力をいただき観察会を実施することになりました。観察会に先立ち、加賀海岸についての豆知識をしおりとしてまとめてみました。ご参考になれば幸いです。

1. 加賀海岸の緑化と海

（1）江戸時代以来の砂嵐との戦い

能登半島の西岸には白山山系から九頭竜川や手取川が流れ込み、美しい砂浜が広がっています。それら二つの川の間、大聖寺川や梯川が流入する加賀海岸では江戸時代以来、村落が消滅するほどの砂嵐との厳しい戦いに明け暮れたと記されています。海岸から1km以上にも広がった広大な砂丘に木を植える試みが、江戸時代以来繰り返されてきましたが、本格的な広域的緑化事業は、明治の後半以来の営林署によるものです。昭和の前半にかけての植林は、困難を極めましたが、様々な工夫を施し、次第にクロマツやアカマツの樹林帯が広がり、ナラ類、マメ科などの広葉樹も混じる樹林帯が形成されています。人が作り上げた新たな生態系は多くの生き物たちのサンクチュアリー樹林帯の形成とともに海際の砂浜には、ハマゴウ、ハマボウフウ、ノハナショウブなどの海浜植物群落が広がり、わが国最大級の絶滅危惧種イソスミレの群落が形成されています。これらの緑化に伴い多数の昆虫類が集まり、その増加は多くの鳥類や小動物の生息を可能とし、陸域生態系の頂点に立つイヌワシやオオワシなどの猛禽類も観察されています。最近では、コウノトリやトキの来遊も記録されています。人類の数が著しく増え、人間活動が拡大し続ける中、絶滅危惧種に指定される種数は増えるばかりです。そのような中、人の知恵と努力で実現した、このような人工生態系といえる場所が、絶滅危惧種を保全し、蘇らせるサンクチュアリーになることを示すかけがえのない場所と言えます。

（2）いのちのふるさと海を教えるアカテガニ

陸域に主な生活圏を移したカニ類の中で、アカテガニは最も代表的なものとして、よく知られています。夏の盛期、満月や新月の大潮時の日没直後に、アカテガニの雌は水際に集ま

り、体を大きく震わせ幼生を放出します。それは、いのちの循環を象徴する光景といえるものです。陸域に生活の場を移した後もいのちの再生を、自らの遠い祖先が誕生したふるさとの海に委ねるのです。幼生の放出に際し、周辺にボラなどの小魚が多数集まり、待ってましたとばかりに幼生を捕食し、さらにその小魚をスズキなどが食べるもうひとつの命の循環のドラマが展開されます。大聖寺川の河口に位置する神島は古来アカテガニの保全に取り組み、貴重な自然遺産が残され、脱皮や冬眠の様子なども観察されています。

2. 加賀市ってどんなところ？

(1) 地理

石川県の南西部に位置し、福井県と接する加賀市。日本海に面する 16.5 km に及ぶ美しい海岸線は越前加賀海岸国定公園に指定されています。塩屋から片野にかけて砂丘地が広がる海浜植物群落、及び海食崖景観地である加佐ノ岬や尼御前岬、舟運による交易を担った加賀三湖の一つである柴山潟、ラムサール条約登録湿地の片野鴨池など、優れた景観と貴重な動植物などが生息する豊かな自然環境があります。

加賀市の約 7 割は森林が占めており、小松市と福井県の境界にある大日山（標高 1,368 m）に源を発する大聖寺川と動橋川（いぶりばしがわ）が日本海に注ぎ、森や水に恵まれた地域です。 加賀市面積 305.87 km²。人口 67,186 人（平成 27 年 10 月 1 日現在）。

(2) 歴史

加賀市に人々が住み始めたのは、約 1 万年前の石器時代で、動橋川流域や柴山潟付近には、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が多くみられます。

大化の改新の後、越前国を経て平安時代初期に加賀国江沼郡となり、末期に起こった源平合戦の舞台である篠原古戦場には、実盛塚や首洗い池などの史跡があります。

室町時代後期、加賀に一向一揆が起こり、守護の富樫氏に代わって浄土真宗による「百姓ノ持チタル国」が生まれ、戦国時代には稀な政治形態が約 100 年間続きました。

江戸時代には加賀前田藩から別れ大聖寺藩となり、産業や文化、生活基盤など今日の礎が築かれました。大聖寺は城下町として賑わい、長流亭や山の下寺院群など藩政時代の歴史資産や町割りを今も多く残しています。橋立は、北前船主の里として栄え、北前船は、江戸後期から明治にかけて、大阪から日本海を通って北海道を往復して積荷を売買しながら寄港地に物資だけでなく日本各地に文化も運びました。

明治維新後は、大聖寺県、金沢県、を経て石川県江沼郡となり、昭和 30 年に山間部の 4 カ町村が合併して旧山中町となり、昭和 33 年に平野部の 9 カ町村が合併して旧加賀市になりました。平成 17 年 10 月に旧加賀市と旧山中町が合併し、現在の加賀市となりました。

(3) 文化

加賀市は、四季の変化に富んだ自然条件のもとに立地し、人々の営みや産業の発展とともに生まれた、風土色豊かな芸能・祭事など多様な文化が豊富にあります

「山代温泉」、「山中温泉」、「片山津温泉」の3温泉地では、独自の温泉文化が生まれました。

山中漆器は、湯治客に応じた椀や盆、茶托などを作り販売するなど山中温泉とともに発展し、九谷焼や絹織物は、大聖寺藩が創始・振興などに大きく影響を及ぼしてきました。

大聖寺には、国の重要文化財に指定されている江沼神社長流亭など藩政時代の面影を残す貴重な文化資産が数多くあり、城下町のまちなみが保全・再生されています。

橋立は、北前船主の里として栄え、江戸末期から明治初期に建築された豪壮な家屋や特色ある石垣などの文化資産が数多く残り、歴史的まち並みや文化を伝える町として、重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。また、雪博士中谷宇吉郎や「日本百名山」の著者である深田久弥など、多くの著名人を輩出したのも歴史的風土恩恵と言えます。

3. 自然遺産、文化遺産など

(1) アカテガニ

大聖寺河口と北潟湖の中間に位置する鹿島の森は（標高30m・周囲600m）加島神社の社叢（神社の森）となっており、タブ・シイ・ツバキ・ニッケなど照葉樹林が伐採されずに残っており、石川県内でも最も良好な森林の一つとして知られ、昭和13年には国の天然記念物に指定されている。この森には陸ガニの一種であるアカテガニが多く生息し、原生林とともに興味深い生態系を形成しています。アカテガニは森林だけではなく夏の夜に海岸に出て放仔し、幼生（ゾエア）は海でしばらく生活してメガローパとなり、やがて上陸し森林生活を送るという森



と海を行き来する動物として知られていますが、その生態はよくわかっていないそうです。観察会は、アカテガニの生態を研究されている石川県立大学教授の柳井先生に案内していただきます。

(2) 上木海岸松植林地域

塩屋から片野にかけての4.3km（幅1km）にはとても白い砂浜が続いています。こ一帯は江沼砂丘ともいい砂浜に沿って青々とした広大な黒松の林が広がっています。

この松林には、冬に北西の季節風によって飛ばされる大量の砂（飛砂）と人びとの戦いの歴史が秘められています。

江戸時代中期まで、この辺りはひのき林があり、塩屋と片野の中間の沿岸部には中浜村という集落がありました。しかし、木の伐採によって、飛砂が年々激しくなりました。晚秋から初冬にかけての暴風により飛砂は空を覆い、陽も暗く、朝に山だった地形が夕方には跡形もなるほど変わり果てていたそうです。塩屋・瀬越・上木一帯は、江戸末期には一木一草も見ることができない砂丘になり、田んぼや畑だけでなく、家屋までもが砂によって埋没し、

人びとは内側への移動を余儀なくされ、ついに中浜村は廃村になってしまいました。また大聖寺川の河床に砂がたまり、ますます上流部の水害の危険性が高まったのです。このような中、大聖寺藩では、上木の浜に砂防垣やクロマツの苗木を植えるなど、江戸時代中頃から本格的な植林が行われました。その後も砂防垣やクロマツやネム等を補植するなど海岸林の整備が現在まで続けられ、海岸林再生への取り組みが100年経過したことを機に、林野町が全国で60か所選定した「後世に伝えるべき治山」の一つに砂嵐の脅威から地域を保全した「加賀海岸国有林海岸防災林造成事業」が選ばれました。

現在の加賀海岸国有林は、松を主林木とする海岸林となっています。前丘から海岸にかけて様々な海浜植物が見られ、初夏から秋にかけて美しい花々（ハマゴウ、ハマヒルガオ、ハマボウフウ、ハマベノギク、アナマスミレ）を見ることができます。

（3）鴨池観察館

鴨池のほとりにある加賀市鴨池観察館は、鴨池の環境保全の拠点となる施設で、1984年に加賀市が建設しました。観察館ではいろいろな展示やクイズラリーを通して鴨池の自然や歴史について楽しみながら学ぶことができ、窓際に設置された望遠鏡を使って目の前に広がる鴨池の生きものたちを観察することができます。



（4）坂網猟

坂網猟とは、江戸時代から続く伝統的な投げ網猟のこと、冬の夕方鴨池を取り囲む丘の上で網をもってカモを待ち、頭上を通過する一瞬を狙って網を真上に投げて捕えます。あまり知られていませんが、坂網猟はカモを捕獲するだけでなく、今も昔も鴨池を守っています。鴨池内の湿地管理や監視活動を続けながら鴨猟を続けています。

（5）北前船の里資料館

藩政期から明治中期頃まで瀬戸内、日本海、北海道を舞台に活躍した「北前船」に関するさまざまな資料を展示公開しています。

資料館は明治9年（1876）、橋立町の旧北前船主、酒谷長兵衛により建てられた建物です。酒谷家は江戸時代から明治時代にかけて6隻の船を所有し、巨額の富を築きました。敷地面積は約1,000坪、オエと呼ばれる30畳の大広間には8寸角（約24cm）のケヤキの柱、巨大な松の梁、秋田杉の一枚板の大戸など、最高級の建材を使った建物からは北前船で巨万の富を築いた船主の豪勢な暮らしぶりをうかがい知ることができます。



（6）加賀橋立船主集落

加賀市加賀橋立伝統的建造物群保存地区は、東西約680m、南北約550m、面積約11.0haの範囲で、江戸後期から明治



中期にかけて、北前船による交易を背景として建設された船主や船頭等の家屋が残っています。敷地は周囲に石垣や堀を設け、通りからやや後退して主屋を建て、そのまわりに土蔵や付属屋、庭園などを配し、主屋は切妻造妻入で、外壁には日本海から吹きつける潮風を防ぐために、船板を再利用した堅板を張っています。内部の柱や梁等は太く、かつ漆塗りで仕上げ、重厚な空間をつくりっています。船主の主屋は、居間や接客の場として使われる広いオエの後方に仏間や座敷、納戸等で構成される6室を、正面から見て左右2列に並べた規模の大きなものです。

石垣や石段、石敷、主屋の棟の石材は淡緑青色の笏谷石でつくられ、集落に柔らかな質感と独特的な風合いを与えてています。

(7) 石川県九谷焼美術館

九谷焼（くたにやき）は、加賀市をはじめ石川県南部地域で作られる磁器。360年の歴史を持ち、赤・黄・青（緑）・群青・紫の5色を使った色絵（五彩手）、緑の色絵の具を印象的に配色し器全体を鮮やかに塗る青手、にじみにくい赤の色絵の具の特性を活かして器全体に細かい描き込みを施した赤絵（金襴手）といった、独特の絵付けが特徴です。



館内展示室は、青手の間、色絵・五彩の間、赤絵金襴の間の3つの様式毎に空間デザインされ季節にあわせた名品を紹介されています。2階には庭園を一望できる茶房もあり、ミュージアムショップには現代の九谷焼作家の作品を展示販売しています。

(8) 吉崎御坊別院

正式名称は真宗大谷派吉崎別院と言い地元では古くから東別院と呼ばれています、蓮如上人が建立された坊所跡地に立つ木造建ての寺院です。今でも蓮如上人由緒地に立つ寺院として毎年沢山の参拝者でにぎわっています。教えは親鸞聖人を宗祖とする「浄土真宗」で京都にある「真宗本廟」（通称、東本願寺）を本山とする「真宗大谷派」のお寺です。



以上出典 ()、()、()